



トルストイを熟読した当時、実篤が筆写した「トルストイ伝記」(明治39年)



前列左、叔父・勘解由小路資承。
後列左から志賀直哉、実篤、木下利玄。
(明治42年、同人誌「望野」を出していたころ。)



明治39年、志賀直哉(左、23歳)と御殿場から赤城山まで徒歩旅行をした実篤(右、21歳)。

在を信じるにも、この言葉は力があつた。彼に勇氣と決心を与えるにも役に立つた。」
(「或る男」より)

四 学習院入学…六歳

明治二十四年、実篤は学習院初等科に入学します。後に文学を志して雑誌「白樺」を出す仲間の一木下利玄とは、この時に同級生となりました。入学当時、親というのは母のことだと思ひこんでいて、父とは何なのかすぐには納得出来ませんでした。得意な教科は読書と数学、苦手なのは作文、図画(美術)音楽、体操だったそうです。初等科のころの成績はクラスで十番くらいでしたが、兄の公共が学習院きつての秀才でしたから、このことでもお母さんをはらはらさせました。

五 叔父・勘解由小路資承の影響

実篤が十歳の時、母方の叔父・勘解由小路資承が、事業に失敗して三浦半島の金田で、田畑を耕したり読書をしたりという生活を始めた。実篤たちも、夏には叔父のもとに行くようになりました。叔父資承は大らかで思慮深く、学問にも熱心で、実篤の考え方や生き方に強い影響を与えました。

六 お貞さんへの恋…十五歳

十五歳の春、武者小路家の一隅に志茂家の姉妹が勉学のために寄宿します。実篤は妹のお貞さんに心をよせます。自ら「初恋」というこの恋は、うちあけることもないまま片思

いに終わり、実篤は激しい失恋の痛みを味わいました。この体験は実篤の心に深く刻まれ、彼が文学への道を歩み始める大きなきっかけとなりました。

七 志賀直哉との出会い…十七歳

学習院中等科六年に進んだ多感な実篤は、二度目の落第をして来た志賀直哉と同級になります。生いたちも性格も違う二人は、時には意見が合わず激しくぶつかることもありましたが、しかし、心の奥深くに通いあうものがあり、互いに相手の長所を学びつ、成長しました。小説の神様と呼ばれる程になった志賀直哉は後に、「私の人生で、武者(実篤のこと)という人間に出会わなかった場合を想像することはできない。」と言ひ、実篤も「志賀直哉との出会いがなかったら、小説家になつていたらどうかかわからない。」と述べています。二人の友情は生涯変わることがありませんでした。

八 トルストイに熱中…十八歳

叔父・資承の感化を受けて、十八歳の実篤はロシアの思想家・文学者レフ・トルストイの著書を読みます。そして、そのキリスト教的な無償愛や奉仕の生活を善しとする意見に共鳴して、熱烈なトルストイアンとなります。実篤は、やがてその思想から離れる時がやって来ます。しかし、十代の終わりにトルストイに学んだことは、実篤の生活や仕事に大きな影響を与え続けました。

もっと知りたい 武者小路実篤

実篤のおいたち

代々皇室に仕えた高い身分の家に生まれ、当時庶民の子は入れなかった学習院を卒業。だから、武者小路実篤は苦勞一つないお坊ちゃん育ち…。そんな誤解を受けたこともありました。しかし、実篤2歳の時に父が病死、わが子をいつくしみながらも家計のやりくりに苦しむ母のもとで、彼の幼少年時代は、けっしてのんびりしたものではありませんでした。

一 生家

武者小路実篤は明治十八年、東京市麹町区元園町（現・千代田区一番町）に生まれましました。武者小路家は、公家と呼ばれる家柄で、明治時代には子爵という位をいただいていた。



右、後に外交官となった兄の公共。中、姉の伊嘉子。左、幼き日の実篤。

二 環境と気質

実篤の生家は、格式の高い家柄でしたが、経済的には豊かとはいえず、家族構成も複雑なため、母・秋子はたいへん苦勞して実篤を

父・実世は、明治四年特命全權大使岩倉具視に同行してドイツに留学した英才でしたが、実篤が二歳の時に病死、以後、実篤は母・秋子によって育てられました。八人兄弟の末子でしたが、兄弟のうち上の五人は早くに亡くなり、実篤には五歳上の姉・伊嘉子と二歳上の兄・公共がいました。

ちを育てました。実篤もけっして気楽なお坊ちゃんとして成長したわけではありません。彼は三十六歳の時に書いた自伝小説『或る男』の中で、こう語っています。

「彼（実篤）は子供の時から強情ばかりで、よく母をもてあました。そして彼は侮辱と嘘には敏感だった。」

「彼は疝痛持の所は父から受けついだ。そして辛抱強い性質は母からうけついだ。この二つの矛盾が彼の性質をかたちづくったことは、彼には仕合わせに思えた。又仕事をくわだてる性質は父からうけ、それを執念深くもちこたえる力は母から受けている。」

三 父の言葉

「この子をよく育て、くれる人があつたらな！」と言った。「そうしたら、この子は世界に一人という人間になるのだが。」

父が言った言葉であったが、彼の一生には大きな力を持つている言葉である。彼が何となく運命を信じ、説くことの出来ないもの、存



前列左、学習院初等科時代の実篤。同中、兄の公共。（明治29年2月）